

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520107

研究課題名(和文) 日本におけるマルセル・デュシャン受容の変遷とその意義

研究課題名(英文) The transition and its significance of reception of Marcel Duchamp in Japan

研究代表者

平芳 幸浩 (Hirayoshi, Yukihiro)

京都工芸繊維大学・美術工芸資料館・准教授

研究者番号：50332193

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：マルセル・デュシャンの日本における受容の変遷とその意義について研究を進め、戦前期のダダからシュルレアリスムへと変化するデュシャン受容のあり方を整理し、その中での瀧口修造と山中散生の役割について再検討を行った。瀧口よりも山中の方が戦前期においてはデュシャンを積極的に評価しようとしていたことを明らかにした。

さらに戦後から現代にかけてのデュシャン受容の容態を明らかにすべく、多くの作家の聞き取り調査を行うとともに、批評言説におけるデュシャン評価の変遷を再検討した。特に東野芳明と中原佑介のデュシャン論を比較検討し、戦後日本において対照的なデュシャン受容が並行していたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：I advanced the research for the transition and its significance of reception of Marcel Duchamp in Japan, analyzed the changing mode of its reception from Dada to Surrealism of the pre-WWII period, and re-examined the role of Shuzo Takiguchi and Chiruu Yamanaka. I made it clear that Yamanaka was much more trying to actively evaluate the Duchamp than Takiguchi at that time.

Furthermore in order to clarify the condition reception of Duchamp from after World War II till now, I conducted the interviews of many artists as well as re-examined the transition of Duchamp evaluation in the critical discourses. In particular, comparing the theories on Duchamp by Yoshiaki Tono and by Yusuke Nakahara, I revealed that there truly was the contrasting two ways of its reception in the post-WWII Japan.

研究分野：美術史

キーワード：マルセル・デュシャン 受容 現代美術 反芸術 シュルレアリスム ダダ 美術批評

1. 研究開始当初の背景

欧米の現代美術の展開を研究するにあたってデュシャンとの関係を検討することは不可欠となっている。アメリカやヨーロッパにおいてはデュシャン研究の範囲にとどまらず、広く現代美術研究においてデュシャン受容の問題が検討されてきた。近年では、Pierre Cabanne による Duchamp & Co. (1997) や Eckhard Schneider による RE-OBJECT(2007)といった著作において、デュシャンのレディメイドに始まる「オブジェ」の問題を中心に、デュシャンが現代美術にもたらしたインパクトと受容の在り方についての詳細な研究が発表された。しかし、これらの研究は、欧米におけるデュシャン受容に限定されたもので、残念ながら日本の状況については言及が全くない。

一方、日本における欧米芸術の受容についての研究は近年盛んに行われている。これは、日本の近代以降の芸術を「受容」の観点から再考することで、伝統的な欧米中心主義による近代理解を相対化するとともに、ヨーロッパ中心の「近代美術」と日本の美術との間にある異質性と同質性をあぶり出そうとする試みとして理解できる。しかし、多くの作家たちが言及し、多くの研究者が承認しているにもかかわらず、デュシャンが日本の芸術動向に与えた衝撃と受容の在り方については、まとまった研究がなされてこなかった。その意味で、本研究は、日本における受容史研究の中で重要な位置を占めると同時に、デュシャンと日本の芸術の関係についての研究の先鞭をつけるものである。

2. 研究の目的

本研究は、20世紀を代表する美術作家マルセル・デュシャンが日本においていかに受容されてきたか、その変遷と意義

を明らかにすることを目的としている。

ゴッホやピカソといった他の作家と異なり、デュシャンを受容するということは「芸術とは何か?」という根源的なテーマについての問い直しを含むものである。それゆえ、日本の近現代美術およびその批評言説とデュシャン受容がどのような関わりを持ってきたかを歴史的な視点で研究することによって、日本の近現代美術が「芸術」をどのように捉え、どのように変化させようとしてきたか、を明らかにすることもまた本研究の目的の射程に含まれている。

3. 研究の方法

調査研究方法としては、(1)文献資料調査、(2)作品実見調査、(3)インタビュー調査の三つの手段を基本として進めた。

文献調査の対象

1. 日本国内で発行された美術雑誌(みづゑ、美術手帖、芸術新潮など)
2. デュシャン受容に関係する美術評論家、作家による著作物
3. 一般雑誌、新聞に掲載されたデュシャン関連記事

作品実見調査の対象

1. 日本におけるダダ、シュルレアリスムの作品
2. 瀧口修造による作品
3. 日本のネオ・ダダを中心とした戦後前衛芸術の作品
4. 1980年代以降の現代美術作品

インタビュー調査の対象

岡崎和郎、中西夏之、篠原有司男、杉本博司、森村泰昌、藤本由紀夫、など

4. 研究成果

上記調査研究方法に則り、研究を三年間にわたって進め、膨大な資料と聞き取り調査の結果をもとに、現在のところ二本の論文にまとめた、それぞれの論文の概略を研究成果として以下に記す。

(1) 「戦前期日本におけるマルセル・デュシャン受容について」

この論文においては、戦前期の日本においてマルセル・デュシャンがどのように受容されたのかを整理考察することを目的として調査研究をおこない成果をまとめた。

まず、大正末期にほぼ同時に始まるキュビズムとダダの両文脈におけるデュシャン受容の在り方を分析した。いくつかのキュビズム解説書籍が翻訳されたことにより、デュシャンの作品は知られることになるが、デュシャン自身が画家としての活動をほどなく休止してしまうため、キュビストとしてのデュシャンは曖昧なまま宙づりになってしまう。一方、雑誌に《L.H.O.O.Q.》が掲載されたことにより、デュシャンはダダの典型として受けとられることになる。だが、ダダは非生産的な活動と解されがちで、真摯な芸術として積極的に移入されるよりも、騒動ばかりが話題となる傾向が強かった。結果として、ダダの文脈においても、日本でのデュシャン理解は中途半端に終わってしまう。パリで直接デュシャンと会った東郷青児は、ダダの集まりでの彼の言葉に感銘を受けたことを示すものの、作品を実際に目にすることはなかった。デュシャンの主要な作品は全てアメリカにあり、パリには作品が残されていなかったのである。一方、当時の日本の美術界にとってアメリカの美術界は、ヨーロッパ的な前衛表現の場としては見なされ

ていなかった。そのため、アメリカから移入される情報にデュシャンが含まれるようになるのは、一九三〇年代にニューヨーク近代美術館で開かれた展覧会での紹介まで待たねばならなかった。

さらに、シュルレアリスムの文脈におけるデュシャン受容の在り方を分析した。デュシャンを日本に初めて本格的に紹介した人物として瀧口修造の名が挙げられるが、本論では瀧口の友人でもあった詩人の山中散生の論稿に注目した。実際、瀧口よりも山中の方が数年早くデュシャンの活動を詳細に紹介している。特にジョルジュ・ユニエの論考を元にして一九三六年秋に山中が『みづゑ』に連載した「ダダ精神」は詳細かつ正確な情報と豊富な図版で、二年後の瀧口による論稿と双璧をなすものである。戦前期においては、デュシャンの独自のエスプリの在り方を積極的に賞賛し喧伝していたのは瀧口ではなく、山中であったことは、両者の文章を比較すればよく分かる。

最後に、デュシャン評価においてより積極的であった山中ではなく、冷淡ととれる態度をとっていた瀧口がなぜ、デュシャン紹介の出発点と言われるようになったのか、その原因について考察した。山中と瀧口のデュシャン理解における分岐点は、山中のデュシャン評価がダダ、シュルレアリスムという「イズム」の内部で行われていたのに対し、瀧口はデュシャンをいかなる「イズム」にも属さない独自の人物として記述した、ということにある。この瀧口によるデュシャンの位置決定、それはアルフレッド・バー・ジュニアがニューヨークで行った位置決定の反復でもあるのだが、それが、孤高の作家としてのデュシャンの祖型となっていることを明らかにした。

(2)「東野芳明のデュシャン / 中原佑介のデュシャン」

この論文においては、戦後日本の美術批評を牽引し同時代の国内動向に多大な影響を及ぼした二人の批評家、東野芳明と中原佑介の言説を取り上げ、戦後日本におけるマルセル・デュシャン受容の典型的様相を整理考察することを目的として調査研究をおこない成果をまとめた。

まず、1960年代から80年代にかけての日本でのデュシャン受容の第一人者であった

東野芳明のデュシャン論の変遷を1960年代と70年代以降とに分割し、それぞれの時代の様相、どう自体的批評言説との関係に再配置することを試みた。1960年代の東野によるデュシャン理解は、50年代に始まるシュルレアリスム理解の延長から始まり、そこから脱却する形でデュシャンの重要性を「沈黙と不制作」に見いだすようになる。当時の言説の生成過程を調査すると、この「沈黙と不制作」という論点が、東野が当時深く関わっていた「反芸術」をめぐる論争から生じたことが判明した。

一方、1970年代に入ると東野のデュシャン解釈は、「沈黙と不制作」から「錬金術的神秘」へと変容する。1977年出版の「マルセル・デュシャン」を中心に見られるこの変化は、世界的なデュシャン解釈の変化に呼応するものでもあったが、同時に東野自身の批評的態度の変化とも連動している。それは、東野が同時代的に最重要だと位置付ける作家であるジャスパー・ジョーンズの作品の変化への対応として現れたものなのである。即物的な表象で反芸術の旗手とみなされていたジョーンズは、70年代に急速に複雑なイメージが混在する「絵画」へと回帰していく。そのジョーンズ作品の「読解」を東野は必要としていたのであり、そこからデュシャンの作品は、複雑

怪奇なイメージ群が多様な意味をはらみつつ、神秘思想的な深い思考を表明している、という解釈が導き出されてくるのである。

最後に、東野と同時代に多くのデュシャン論を著した中原佑介のデュシャン論を整理し、東野の言説と比較対照することで、これまで絶対視されてきた東野のデュシャン論の相対化を試みた。デュシャンの精神を「スフィンクスの謎」とした東野に対して、中原は非合理を含み込んだ科学的論理をそこに読み取る。さらに、東野がデュシャンの精神を永遠化するのと対照的に、中原はデュシャンのロジックをヴィトゲンシュタインの思考と接続し、20世紀初頭の知的活動の同時性に着地させる。二人のデュシャン理解は、互いを鏡としつつ綺麗に逆向きの弧を描くように展開していった。それは批評的な対立軸でもあったであろうが、デュシャン受容から言えば、その差異は、二者択一を迫る対立関係というよりも、別の語りの可能性を提示する相補的な関係にあることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

平芳 幸造、「戦前期日本におけるマルセル・デュシャン受容について」、美術史学会誌、査読有、第177冊、2014、34-49

[学会発表](計2件)

平芳 幸造、「東野芳明のデュシャン / 中原佑介のデュシャン」、美術史学会全国大会、岡山大学(岡山市)、2015.5.24

平芳 幸浩、「戦前期日本におけるマルセル・デュシャン受容について」、美術史学会西支部例会、京都工芸繊維大学（京都市）2013.11.16

()

研究者番号：

〔図書〕(計0件)

(3)連携研究者

()

〔産業財産権〕

研究者番号：

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

平芳 幸浩 (HIRAYOSHI, Yukihiro)

京都工芸繊維大学・美術工芸資料館・准教授

研究者番号：50332193

(2)研究分担者